

実物の美術作品を用いた鑑賞授業の開発と実践

—実物の作品で美術の授業はどう変わるか—

M13EP006

塚原 英樹

1. はじめに

実物の美術作品が持つ魅力は生徒の鑑賞に対する意欲に大きく作用し、美術科で育みたい資質や能力である美術に対する意欲や関心、そして鑑賞の能力の育成に効果がある。中学校学習指導要領解説（美術編）にも、「学校や地域の実態に応じて、実物の美術作品を鑑賞する機会が得られるようにする」と明記されている（文部科学省，2008）。それにも関わらず、中学校美術の授業で実物の作品を用いた鑑賞（“実物鑑賞”）の授業は殆ど行われていない。

美術の授業を通して実物の作品を鑑賞することは貴重な体験である。特に美術館を訪れたことがない生徒にとって、その体験は特別な意味を持つ。そして筆者と同じように生徒たちに実物の美術作品を見せたいと考えている美術教師は多い。例えば、畔田・鈴木(2013)が中学校教師に対して行ったアンケート調査によると、利用したい教材教具として「実物や作品そのもの」は上位に挙げられている。その反面、同時に調達のための時間が確保できず断念した教材教具の1位でもあることから、実物の作品を用いた授業を行うことが決して容易なことではないことを表している。

通常、中学校で行われる鑑賞の授業では教科書や資料集などに掲載されている図版を用いることが多い。また、教師によっては作品の画像を掲載した自作の学習プリントを使用したり、教材会社から販売されている複製画を活用したりしている。しかし、一般的に図版は実物の作品と比べ、サイズや色彩、質感が異なり、そこから受ける印象も大きく変化

することが知られている。そのため本来の作品が持つ魅力を十分に味わうためには、実物の作品を鑑賞することが望ましい。

生徒たちが最も気軽に実物の美術作品と出会える場所は美術館である。しかし、生徒を美術館に引率していくためには、年間指導計画の調整や生徒の輸送に用いる大型バスの手配など大がかりな準備が必要であり、通常の授業の枠を越えた行事（“特別なイベント”）にしなければならない。

また、既に学校へ貸し出し可能な作品や複製画を用意している美術館もあるが、作品の数や種類が充実しているとは言えず、利用実績も伸びていない。そして、もう一つの課題は、美術館以外で行われた実物鑑賞の実践例は少なく、効果の検証や、指導方法についての研究が進んでいないことである。

そこで、本研究では実物の美術作品を用いた鑑賞授業の開発と実践を行い、その効果を検証することで、県内の小中学校で実現可能な実物鑑賞の一例を示すことを目的とする。

なお、本研究は、2年間を見通して行った研究の2年目に当たる。そのため、以降では1年目（25年度）の研究に関しても適宜記述しながら検討を進めることとする。

2. 研究の目的

1年目である25年度は、学校で実物の美術作品を鑑賞する授業を行うため、学校と美術館との連携の在り方を探ることを第一の目的とした。その上で、美術館で行われる従来型の鑑賞教育だけではなく、学校と美術館のそれぞれの資源を有効活用し、学校で実物鑑

賞の授業を行うための道筋と解決すべき課題を明らかにすることを第二の目的とした。

2年目である26年度は、美術作品の魅力を生かした鑑賞の授業を開発、実践し、実物の作品が生徒の鑑賞への意欲や関心、鑑賞の能力の育成に効果があったかを検証することを目的とする。

3. 研究の方法

《平成25年度の研究》

(1) 中学生への事前調査

研究に先立ち、所属校の中学生に対して実物作品の鑑賞に関するアンケートを行った(資料1)。その結果から、自主的に美術館見学をしたことがある生徒は全体の約2割と非常に少ないことが分かった。行ったことがない生徒の中には、興味が無いといった本人の美術館への関心の低さが理由で行かなかった生徒と、時間や機会がなかったという理由から行けなかった生徒とが混在していることが分かった。美術館との距離や親の仕事の理由に挙げた生徒もおり、美術館への見学経験の有無には、本人以外の要因も大きいということなどが明らかになった。

(2) 美術館への聞き取り調査

地域の美術館を訪問し、学校との連携の現状や学校へ貸し出し可能な作品の有無について調査した(資料2)。その結果は従来型の学校と美術館との連携だけではなく、作品の貸し出しを含めた新たな連携の形に対しても前向きな美術館が多いことが分かった。学校への教育普及を目的とした貸し出し可能な作品を備えている美術館や、運搬に学芸員や美術館職員が携わることで貸し出し可能な作品がある美術館があることが分かった。

(3) 教材開発と授業実践(美術館の収蔵作品を用いた実践)

南アルプス市立春仙美術館より、名取春仙の浮世絵版画2点をお借りして授業を行った(資料3)。実物ならではの色の鮮やかさや形

の繊細さに着目するように授業展開を工夫し、多くの生徒が主体的な鑑賞活動に取り組むことができていた。

《平成26年度の研究》

・教材開発と実践、効果の検証(郷土作家の立体作品を用いた実践)

実習校において、実物の作品を題材にした鑑賞授業の教材開発と実践を行い、生徒の反応や学習プリントへの記述などから実物鑑賞の効果を検証した。その結果と考察については次節に示す。

4. 結果と考察

(1) 教材開発と授業実践

①教材開発に向けての事前準備

昨年度から引き続いて美術館との連携を進めていく中で、本研究に協力して頂ける作家についても調査した。昨年度の研究を通して本研究に協力をしてくださっている学芸員から、甲府市在住の作家中村修二氏を紹介して頂いた。直接中村氏にお会いし研究の趣旨を説明したところ、本研究への協力を快く引き受けてくださった。

中村 修二 氏 (甲府市在住)

- ・新制作協会会員
- ・日本美術家連盟会員
- ・山梨美術協会会員

実際に中村氏のアトリエで様々な作品を見せて頂きながら、生徒の実態や授業のねらい、そして輸送や学校での鑑賞に耐えうる頑丈さを考慮して、それぞれ特徴が異なる4点の作品をお借りすることができた。

中村氏の作風は平面から立体、そして抽象から具象と言ったように多岐に渡るが、本題材では次節で示すように中学3年生が自分の内面と作品を照らし合わせながら、主体的に鑑賞に取り組むことを目指しているの、様々な作品の捉え方がしやすい抽象的な作品

を選ばせて頂いた。それらの作品は流木や石などの自然物、身近な廃材や古い道具などを着色したり組み立てたりして、新たな命を吹き込んだものである。普通なら見落とししてしまいがちな「モノ」が作家の手にかかり新たな印象を与える「作品」になるということを実感させられる。

図1はお借りした4点の作品のうちの1点である。葉の形に削り出した木材をアクリル絵の具で着色し、それを朽ちた木槌の割れ目に差し込んだ作品である。

なお、本実践に際して、作家からは作品の借用だけでなく、作品に使われている素材や表現技法、作品に込めた思いなどの説明を受けることができた。それらは教材開発をする上で大変参考になるとともに、生徒たちにも作者の言葉として授業の後半に紹介することができた。生徒にとって作家が作品について語った言葉は新鮮で、最後に生徒たちの学びをもう一段階深めてくれたように感じている。



図1：中村修二作「熟す木づち」

②鑑賞の学習を充実させるための手立て

実物鑑賞にしても図版の鑑賞にしても、鑑賞の授業が学習指導要領で示されているねらいに近づくためには、日々の授業の積み重ねが重要である。当然、本題材も日々の授業のうちの一題材であることを忘れてはいけない。

鑑賞の授業は未だに美術教師の中でも指導が難しいと言われることが多く、教師によ

てその指導の方法や鑑賞の捉え方も千差万別である。実際にそれぞれの学校で実践されている鑑賞の授業は全くの別物と言っても過言ではない。そこで、共通の認識で本実践の効果について検証するために、鑑賞について筆者が日々の授業の中で心がけていることを整理してみたい。

鑑賞の学習はいわゆる「鑑賞の授業」だけでなく、表現が主体の授業でも適宜行われる活動である。そこで普段の授業における授業者の鑑賞への意識づけは非常に大きな意味を持つと考えられる。筆者が意識的に行っている生徒の鑑賞活動を活性化させる手立ての中で、本題材の授業を行う上で特にプラスに働いたと考えられる手立ては次の3点である。

【表現の授業では、作品をつくる上で工夫したことを文章で書くという活動を入れる】

⇒美術の授業では、上手につくることではなく、如何に工夫できたかということが重要であることを伝える意図がある。

【表現の授業の中で、周囲との自然な対話から互いの作品の良さや工夫について語りあえる雰囲気を作ることとして授業を行う】

⇒それぞれの生徒が自分の意見を持ちそれを言葉にすることの大切さを伝えるとともに、発言することを遠慮したり恥ずかしがったりすることがないように慣れさせるという意図がある。

【鑑賞の授業では、必ず導入段階で鑑賞の意味を確認し、その授業のねらいを明確にする】

⇒鑑賞の授業はただ「見る」授業ではなく、良さや美しさを見つけたり、作品に自分なりの価値を見出したりといった「味わう」活動であることを伝える意図がある。

鑑賞への意欲や関心、そして鑑賞の能力を高めるためには表現の授業を含めた全ての美術の授業の時間を通じて、その資質や能力を育成していく必要がある。つまり実物鑑賞の

効果を高めるためには、まずその前提としての鑑賞の授業の充実が欠かせない。

実物の作品を用意することよりも、鑑賞の能力を伸ばすことができるような授業を継続的に行っていくことの方が重要である。

③題材の概要

- ・授業は11月に筆者の所属校である県内公立A中学校の3年生（4クラス・計134名）を対象に行った。

- ・題材名 「作品は何を語るか」

- ・領域 中学3年・鑑賞

- ・題材の目標

多様な表現の作品に関心を持ち、造形的なよさや美しさ、作者の心情や意図、創造的な表現の工夫などを感じ取り、自分の価値意識をもって味わうことができる。

- ・学習指導要領との関連

中学校2・3年 B鑑賞

(1)美術作品などのよさや美しさを感じ取り味わう活動を通して、鑑賞に関する次の事項を指導する。

ア. 造形的なよさや美しさ、作者の心情や意図と創造的な表現の工夫、目的や機能との調和のとれた洗練された美しさなどを感じ取り見方を深め、作品などに対する自分の価値意識をもって批評し合うなどして、美意識を高め幅広く味わうこと。

④授業の展開と指導上の工夫

実物鑑賞の効果を高めるためには、何よりも実際に作品を鑑賞する時間を十分に確保することが重要である。そのためにも学習活動（表1）を精選し、教師の発問や指示を学習のねらいに則したものにしていことが欠かせない。また、本題材のような立体作品の場合は展示の仕方も鑑賞に影響を与える要素の一つである。そのため作家と事前に打ち合わせをする中で、学校にある設備を生かした展示の仕方を検討した。今回の実践では、学校

備品の高さ40cm程のモデル台に黒い布を被せたものに作品を展示することにした。そうすることで作品を様々な角度から鑑賞することができるとともに、生徒が作品に触れたり倒したりを防ぐ効果がある。

作品の提示の仕方については、最初から実物を鑑賞させるのではなく、一度写真で作品を鑑賞してから実物の作品を鑑賞するようにした。それは、昨年度の実践から、実物鑑賞をする前に図版で実際の作品を想像しながら作品を味わうことで、後の実物鑑賞の効果が高まることが明らかになったからである。

また、単調な活動にならないように個人で鑑賞する場面やグループで鑑賞する場面などを使い分けたり、様々な視点で自分に合った作品を選ぶ活動を入れたりして、鑑賞が苦手な生徒にも取り組みやすくなるように工夫をしている。学習プリント（巻末資料参照）は、授業全体の流れに沿った構成にすることで、本時の学習内容を後で振り返りやすいように配慮をした。

表1：学習の流れ

展開	学 習 活 動
導入 7分	1. 鑑賞の意味を確認し、本時の学習のねらいを理解する。
展開 35分	2. <u>学習プリント（図版）の作品を鑑賞し</u> 、4点の作品から自分が好きな作品を選び、その理由を記入する。 3. <u>4点の実物作品を順番に鑑賞し</u> 、それぞれの作品の題名を考える。考えた題名を付箋に書いて作品の近くに貼る。 4. <u>今の自分の気持ちに近い作品はどれかを考え</u> 、同じ作品を選んだクラスメートと <u>意見交換</u> をする。 5. <u>作者がそれぞれの作品に込めた思いや制作のきっかけなどを聞く</u> 。
まとめ 8分	6. 本時の授業を振り返り、感想をまとめる。

(2) 効果の検証

①実物鑑賞時の生徒たちの様子

【主体的に鑑賞する姿】

多くの生徒が様々な角度や距離を試しながら、主体的に鑑賞をしていた(図2)。それぞれの作品をみた後で、再度同じ作品を鑑賞する生徒もいた。教師の働きかけがなくても、自由に意見交換をしている姿が見られた。



図2：主体的に鑑賞する姿

【作品の印象や作品の見方について意見交換する姿】

作品の印象や自分で考えた作品の題名、また作品を通して見つめた自分自身のことについて、クラスメートと会話を交わすことができていた(図3)。グループになって鑑賞したことで、作品に対するそれぞれの見方の違いを知ったり、自分なりの作品の見方を更に深めたりすることができていた。



図3：クラスメートと意見交換する姿

②授業後アンケートの分析

・「美術館や美術展で実際の作品をみてみたいと思いますか」

とても好きになった	少し好きになった	どちらともいえない	少し嫌いになった	とても嫌いになった
41人	63人	18人	0人	0人
33.6%	51.6%	14.8%	0%	0%

今回の授業を受け、全体の約8割の生徒が美術館や美術展への見学に対して前向きな姿勢であることが分かった。1年前に同集団に対して行ったアンケート結果と比較をすると、「とてもそう思う」が16人から48人と大きく変化している。

・「この授業を通して、鑑賞の授業に対する意識はどのようになりましたか。」

とてもそう思う	少しそう思う	どちらともいえない	あまり思わない	全く思わない
48人	47人	16人	8人	3人
39.3%	38.5%	13.1%	6.6%	2.5%

今回の授業を通して、全体の8割以上の生徒が鑑賞の授業に対して、少しまたはとても好きになったと答えている。通常の図版を用いて行う鑑賞と比較し、生徒たちにとって意欲的に学習しやすい条件が整っていたと考えられる。

③学習プリントの記述

・【鑑賞の意欲が高まった生徒の記述】

作品を目の前でみて、やっぱり写真よりも直接みる方が新しく気付く点も多いし、楽しいと思った。自由に自分の想像で見れるので、すごくいいなと思った。美術館には、1年くらい行ってないので、また行ってみたいです。

実際の美術作品を間近で鑑賞したことで様々な発見があり、鑑賞への意欲が高まったことが記述に表れている。実物の作品を見ることの楽しさを実感したことで、美術館見学に対しても意欲を見せている。

・【自分の内面を見つめた生徒の記述】

今の私は受験生で、したいこともしてられない状況に立たされています。この作品のかごの中に生えている草のように、私は自由ではありません。でも、このかごの底が金色であるように、私を支えてくれている金色の「友人・先生・塾の人たち」などのおかげで、私はかごの中で「生えていられる」のです。合格して、もっと成長してこのかごをつきやぶるほど大きく成長したいです。

この記述は、4点の作品から今の自分の気持ちに近い作品を選ぶという学習活動に対する答えとして書かれていた。中学3年生という時期もあり、高校受験へのプレッシャーを感じながらも、前向きに学習に取り組もうとする自分自身を作品と重ね合わせている様子が伝わってくる記述である。

自分と作品を重ね合わせて鑑賞することで、自分なりの価値意識をより一層強く持つことができている。

・【自分の価値意識を持って鑑賞できた生徒の記述】

友達の見聞などを聞いて、やはり、他人とは考え方がちがって、自分の考えとはちがうんだなと思いました。中村さんのつけた題名と、私がつけた題名は、ちがすぎて逆に楽しかったです。こんなに近くで、人の作品を見たのははじめてです。近くで見ると、またいろんな見かたができました。見る場所を変えると同じ作品なのに、ぜんぜんちがう作品に見えておもしろかったです。

意見交換をしたことで、作品に対する見方が多様であるということを確認に感じている。また自分自身の作品の見方も深まっている。色々な角度から作品を鑑賞することで、作品から受ける印象が異なることにも触れられている。

④授業研究会で出された意見

本実践では1クラスの授業を公開研究授業として行い、近隣の小中学校の先生方に授業を観察して頂いた。授業後には授業研究会を開き、生徒たちの姿や学習プリントの記述をもとに授業の振り返りを行った。

授業研究会で出された主な意見は次の通りである。

- ・生徒たちが真剣に作品と向き合う姿から、実物の作品を鑑賞する意義を改めて感じた。
- ・中学3年生が恥ずかしがらずに自分の気持ちを言葉にして発表していたことに驚いた。
- ・自分の意見を持つだけでなく、他者と意見を交換したことで鑑賞がより深まっていた。
- ・授業者が作品を丁寧に扱う姿を見せたことで、美術作品を大切にしようとする気持ちを生徒にも伝えることができた。

(3) 研究のまとめ

授業の様子、学習プリントの記述などから本題材の目標が概ね達成できた生徒は全体の約7割であった。授業の進め方や学習プリントの構成などには多くの改善すべき点があるが、鑑賞の授業実践として一定の成果があったと感じている。

実物作品を鑑賞することのメリットは様々あるが、作品の持つ魅力をそのまま味わえることで、図版を鑑賞するよりも生徒の意欲が高まり、より主体的な学習が行えることが最大の利点だと考えている。また、図版よりも実物の作品の方が、作品を通して作者や他の鑑賞者といった「人」との対話が促されたり深まったりすることが分かった。

また、自分の気持ちと近い作品を選ぶという活動を通して、多くの生徒が作品に対する自由な意見を持つことができた。作品に自分自身を投影することで、作品の見方や感じ方が豊かになることを実感できた生徒が多かったのではないだろうか。本題材の目標を達成させるための手段としても、有効だったと感じ

じている。否定的な意見も含めて自由に発言できるという面でも、学校での鑑賞は効果があった。また、学校にある様々な教具や黒板などが使えるということも、学校での鑑賞のメリットだと感じた。

授業後のアンケートで美術館への鑑賞に前向きな姿勢の生徒が増えたことは、学校と美術館との連携を深め、継続可能な協働関係を築くためにも大きな意味を持つと考えている。

5. おわりに

全ての鑑賞の授業で実物の作品を用いることは不可能である。今後も大半の鑑賞の授業は図版を用いて行われるであろう。しかし、年間にたった一題材でも実物の作品を間近で鑑賞できる授業を行うことは大きな意味がある。それは実物鑑賞が作品をみる視点を広げたり、読み取りを深めたりといった、鑑賞の能力の向上に欠かすことができないものであり、作品に対する愛着や美術文化に対する理解に大きく寄与すると考えるからである。

そのためにも実物鑑賞の授業を単発の授業としてではなく、いかに通常の授業とつなげていけるかが今後の課題である。

この2年間の研究を通して、学校と美術館との新たな連携の在り方について深く考察することができた。美術館が提供している様々な教育普及プログラムを活用することも大切だが、学校が求める美術館の新たな役割についても真摯に伝えていくことが、両者の連携を深め協働的な関係を築いていくためにも重要なことだと感じている。

6. 引用文献

- ・畔田暁子・鈴木香苗(2013)。「中学校美術科の鑑賞学習における教材教具の利用状況および課題」.美術教育.No.297.024~032
- ・文部科学省(2008)。「中学校学習指導要領解説 美術編」.日本文教出版

7. 資料

(1) 昨年度の研究の概要

①中学生への事前調査

平成25年10月、県内A中学校の1年生110人に対して鑑賞についてのアンケートを実施した。(A中学校は4km圏内に県立美術館があり、比較的美術館に近い地域の学校である。)

○美術館や美術展での鑑賞経験の有無を調査

『美術館や美術展に行ったことがありますか』

ある	ない	覚えていない
25人	21人	64人
22.7%	19.1%	58.2%

あると答えた生徒が全体の約2割に留まっており、美術館が比較的近くにあるにも関わらず、A中学校の生徒にとって美術館が身近な存在でないことが読み取れる。「覚えていない」という生徒の多さは、美術館の見学が主体的な活動でなかったことを予想させる。

○美術館や美術展に行かなかった理由の調査

『美術館や美術展に行かなかった理由はなぜですか』

主な理由	人数
興味がなかったから	11
行く時間がなかったから	6
機会がなかったから	3

その他の理由
・美術館から遠い ・面倒だった ・親の仕事がある ・分からない ・何となく ・そこまで考えたことがない

行ったことがない生徒の中には、興味がないといった本人の意思で「行かなかった生徒」と、時間や機会がなかったり、美術館との距離や家庭の事情等で、「行けなかった生徒」とが混在していることが分かる。家庭で連れて行ってもらうことが困難な生徒は想像以上に多く、学校教育で実物の美術作品を鑑賞する機会を作ることが必要だと感じた。

②美術館への聞き取り調査

・手続き

県内の美術館の中から、既に学校との連携が行われている美術館や教育普及活動を行っている美術館をホームページ等で探し、学校との連携の現状や今後の課題、さらに学校へ貸し出し可能な作品があるかを調査した。

・結果

美術館も小中学生に対する鑑賞教育の必要性を強く感じており、学校との連携に前向きな美術館が多いことが分かった。作品の貸し出しについて、作品の保護の観点から遠方の学校では難しいが、市内の学校ならば可能という美術館が幾つかあった。(平成26年2月時点で、県内5か所の美術館で貸し出し可能な作品があることが分かった。)

また、学芸員を通じて、実物鑑賞の授業に協力して頂ける作家を紹介してもらうことができ

た。作家との連携を考えた時に、美術館を窓口にするには、選ぶ作品が授業者の主観に偏ってしまふことを防げるという利点もある。

③教材開発と授業実践(美術館の収蔵作品を用いた実践)

南アルプス市立春仙美術館より、名取春仙の浮世絵版画2点をお借りして授業を行った。実物ならではの色の鮮やかさや形の繊細さに着目するように授業の展開を工夫したことで、多くの生徒が主体的な鑑賞活動に取り組むことができていた。

また、美術館からは作品の借用だけでなく、学芸員と授業の内容に関する相談もでき、豊かな鑑賞教育の実現のための協働的な関係を構築することができた。

(2) 学習プリント

年 組 番 氏名

作品は何を語るか

1. 4点の作品を鑑賞してみましょう。



作品A「 J



作品B「 J



作品C「 J



作品D「 J

2. あなたが一番気に入った作品はどれですか?理由も書いて下さい。

私が選んだ作品は【 】です!

3. 今の『自分の気持ち』に近い作品はどれですか?理由も書いて下さい。

私が選んだ作品は【 】です。

4. 授業の感想を書いてください。

(Blank space for student response)

○作家紹介

中村 修二さん(甲府市在住)

～経歴～
 2000 「中村修二展 1970s・1980s・1990s」
 2003 新制作展 新作家賞受賞(同)05年受賞)
 2005 「中村修二展」主催:山梨県立美術館
 2005 「中村修二の世界」主催:白根桃源美術館
 2006 新制作協会 会員推薦
 2011 「葉-教会地御題によせて」展(伊勢)神宮美術館
 新制作協会会員 日本美術家連盟会員

～みなさんへのメッセージ～

作品の見方、感想はみる人の自由です。



『あちはひる(い)窓』
145×242cm (2013)



『マティスからの返音・木洩れ日』
185×300cm (2011)